

# 野山文化往來

—特に古代に就て—

坂口龍道

野山文化往來とはあまりに要を得ない題ではある。實は野山開發前を中心にして二三の大師創業時代の文化を少し見たまでだ。野山とは高野山の事であつて、高野山名所圖會に左の事が記されてゐる。

凡山に稍凹やかにして、彼八葉の峰四方に周り、木立いと暗く生ひしけり、うき霧朦朧として滿渡りて晴れみ曇りみ四つのとき定まれる事なし、されば正月二月も冬にかはらず、冴えわたり、やうく三月の末、四月のはじめに櫻は吉野初瀬の色におくれず、極樂淨土の七重の寶樹眼のあたりなり、郭公はおのが五月の時を違へずしばく聲ふり出で、五月雨暗き楨の零にきほひつゝ黄泉路よりの言傳を談るに似たり、さればにや其鳥の落し文云ふ諺もあり古歌に、

ほこゝぎす初聲よりも待るなり高野の山の曉の空

土さくる六月七月も暑さいと薄く、麻衣を着る事なく、老僧なごは綿入の衣を重ねて着るもあり、夕づけても蚊の名のみ絶えて聞えず、宵ながら明行く月影もそとに身にしむ心地して、起ふし甚安ければ、暑を避くる爲に來り遊ぶ風流男も多かり、八月ばかりよりは、霜うちさやぎて、谷々の鹿の聲いと悲しく、一夜宿から旅人も、うき世の夢を覺して曉の袖を絞るめり、紅葉いとこく染めわたして、墨染の袖にみだれ、雪は秋の末より降りそめて十月の頃にも稍もすれば道を埋み、十一月より後は常に三尺ばかりの深さにて、高き履子を著き、雪浴衣云ふものうち着て、法師だちの行かふさまあやしむべし、鐵塔彫樓なごは一遍の白玉界云ふべく。

降る雪のつもればいと高野山うき世の道やへだてはつらん

こよまれるも實に左こそ思はるゝなり。こ。

先に「女人禁制高野山」云ふものを一寸記したが外圈であり、まごまらず、しかしその「高野山」を呼べば「女人禁制」さくる吾人の頭にいくらか奇異の感で以て見た事であります。乃ち人間性なるものが山をバックにして流轉した昔々を、又現今その山に對する女人問答を知るのは心のひかれるものであり、此に文化往來の一問が投げられるのであります。

大體大師は高雄山に嵯峨天皇御宇、弘仁七年の夏頃まで留まられてゐたので、その高雄山は大師の初めの心境、具象的に言へば、大師だけの御修行精舎としては最適の地ではあつたのであります。併し堅固な信仰を保ち、法燈弘通の連綿たるを思へばもつゞ大々的な道場の必要にせまられたのであります。而も要は學徒教養であつて、高雄山にしては町の俗事にも觸れやすく、従つて幽靜なるを保ち難く、町の佛教ではない、山の閑地へ求められた大師の御心持は目に見えるのであります。

先に彼の小角（行者）は大峰山の靈峰に攀ち登り、修驗道に専心した事がある。又下野の勝道は日光山を初めて居り此に亦越中の泰澄は立山を開顯しその宗に専ら務めた。而も時代を同じくして入唐しての傳教大師は後ち歸朝し、平安の靈場比叡山を開創して天台教學の五時八教流布の根本道場を安定して王城の鬼門を鎮めてゐるのである。此に大師も三密加持の禪定の靈山を求めあぐんだのも大いに肯定される事だ、でなくとも世は町の佛教の失墜即ち奈良朝佛教の餘弊甚だしく、僧侶はすたれ、寺院の威嚴は失はれ、いわんや修禪寂靜の暇があらうはすかなかつたのである。丁度大師は深山寂寞之洋地、是密教相應之場として高野山を射的てたのである。

高野山を射的てるまでは幾多の事情、傳説はある事ではあるが、その頃圓明律師（東大寺二十一代別當）の文に紀伊の良豐田丸太夫云ふ人に高野山の靈地が報ぜられたのである、そこで大師は弟子信叡法師を使はし、又實慧・泰範の二師

をして地の理をたしかめさして此にいよく官許を乞ひ奉る運びに至つたので、其の文に曰く

名曰高野、計當紀伊國伊都郡南、四面高嶺、人蹤絕蹤、今思、上奉爲國家下爲諸修行者、葦夷蒞敷聊建立修禪一院、經中有誠、山河地水、悉是國主之有地、若比丘受用他不許物、即犯盜罪者、加以法之興廢、悉繫天心、若大若小、不敢自由望請、蒙賜彼空地、早遂小願、然則四時勤念、以答雨露之施、若天恩允許、請宣付所司、輕塵宸扆、伏深悚越  
沙門空海誠惶謹言、

弘仁七年六月十九日沙門空海上表

ついで又同年七月廿八日に國司より國符を、伊都、那賀、有田の三郡司に下された、御手印縁起に官符所載す四方高山として標題に

東 高山摩尼峰

—— 大日本國今大和國名地紀伊國堺山也謂丹生川口上是也

南 高山當河長峰

—— 謂阿手河南橫峰是也

西 高山應神山

—— 謂神野山神勾谷及生石峰是也

北 高山宇田峰

—— 謂丹生北吉野川南峰是也又云槇尾

と記してある。此に言ふ神勾川とは今の貴志川、吉野川とは紀の川で、常川とは在田川所有田川の事である。その地域の廣大は之にて知り得られるのである。で大師は高野山の伽藍建立につき先の實慧泰範にその設計をさして茲に高野山金剛峰寺の開創を見るに至つた。もう一つの高野開山の起因が第一回の登山によつてゐるこの時は然し青年故この地は佛教流布、密教の中心根本道場等の事は夢にもなかつた事と思はれる併し一度び入唐求法して佛教界最上の秘密眞言宗を請來されてよりは日夜その根本道場を求め給ふたのみならずその根本道場とし、大師の住居には都に遠ざかり又佛教的感化のない他地を求める必要にせまれたのである、思ひついたのは若き頃の高野登山である、求められ尋ねて高野の

地主宮内太郎家信に逢はれたのは幸甚のめぐり合せであつた、而して良豊田丸太夫の導きも勿論注意せねばならんが、而して二三度より勅許のはこびこなつて嵯峨帝より前述の地域を給はり高野寺領としたのである、又前にもざるが此に於て四經が已にきまりそして内外の大結界が修せられた、その敬白文に

沙門遍照金剛敬曰、十方諸佛、而即大曼荼羅海會衆、五類諸天、及以國中天神地祇、並此山中地水火風空諸鬼等夫有形有識、必具佛性、佛性法性遍法界而不二、自身他身與一如而平等、覺之者常遊五智之毫、迷之者每沈三界之泥、是故大悲大日如來獨鑿三昧耶之妙趣、悲歎六趣之塗炭、如來智雷震於法界殿、秘密曼荼羅傳乎閻浮提、從金剛薩埵傳授龍猛菩薩、師師相傳迄今不絕云云……こして居られる。

かくして靈山高野の山は確保されたのであるが、空海が手を入れ足をふみ入れるまでに先住民族に積極ではないにしても併し大きな文化貢獻はなされて居つた、外でもない、崇神天皇の御代に天孫丹生津姫の一族がこの御山に入り込んだ事である、いや山には入らないにしてもこの地を中心に施政を布いた事はこの當時の當地方にこり大なる事象であつたに相違ない。

一體紀州は紀の國であり又紀の國は木の國の變名である、古來古事記神代の卷大穴牟遲ノ神の記事に次の如く出てゐる。

「速遣<sub>ニ</sub>於木國大屋毘古<sub>ノ</sub>神御所<sub>ニ</sub>」ある。又木國は大八洲國の内大日本豊秋津洲の最南の一區域にして東の方に熊野國にあるを合せて木の國と稱すこあり、木の國の名が實證する如くに木を以て國號とした事は五十猛ノ命に妹こももに素戔鳴尊に尊ひ天降りされし時樹種を大八洲國に播殖され當國は其三神御鎮座ありし地なるを以て樹木の暢茂せし事他の國よりも殊に勝れたるを以て「木ノ國」と名づけたのである。

古語拾遺に「神武天皇建都橿原一經營帝宅一級令天富命率手置帆負彥狹知二神之孫以齋斧齋鉏一始採山材構立正

殿<sup>ニ</sup>其裔今在<sup>ニ</sup>紀伊國名草郡御<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup>麿<sup>ニ</sup>香<sup>ニ</sup>郷<sup>ニ</sup>採<sup>ニ</sup>材齋部所<sup>ニ</sup>居謂<sup>ニ</sup>之御木造<sup>ニ</sup>殿齋部所<sup>ニ</sup>居謂<sup>ニ</sup>之麿香<sup>ニ</sup>

こあるを見るについては橿原宮の殿舎の材木は木ノ國より運んだ様である。又貞觀十八年の記に「外從五位下日置造繩主等向<sup>ニ</sup>紀伊國<sup>ニ</sup>占<sup>ニ</sup>採<sup>ニ</sup>大極殿材木<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>こある、即美材の出る所以であり又「木ノ國」の名の起るわけである。この木ノ國も元明天皇和銅五年文字を紀伊ノ國に改められたのである。一寸横道に入つたがその政治的統治も古く神武天皇東征以前に三分されてゐた様である、即名草郡邊の地は地魂命の子御氣持命が世世その地を領（日前宮の條に詳し）し後に名草戸畔になつたのであるが……熊野の地は饒速日命の子高倉下命、その東に丹敷戸畔が領してゐたものである（事<sup>ニ</sup>半婁郡<sup>ニ</sup>論<sup>ニ</sup>に詳<sup>ニ</sup>し）そこで高野山地方一帯は勿論この名草戸畔一族により支配され、その地方的政府の下に支配されてゐたのは言ふまでもない事だ。神武天皇東征の御時木ノ國にて名草戸畔を誅し給ふた、この時皇兄彥五瀨命が流れ矢にて戦死なされた（今の大神、龜山神社の傍に御あり）次で熊野にては丹敷戸畔を誅し給ひ高倉下命は詔靈劍を奉り歸順したのである。又神武天皇都を大和に定められた時御氣持命の後天道根根命を新に紀伊國造に任ぜられてゐた。然るに崇神天皇の朝に入つて天孫豐鋤人姫命が日前、國懸兩大神の御靈代を、伊勢大神の御靈代を、共に戴き奉りて諸國を經歷し、この地に鎮座されたのである、此に於て未だ餘勢を誇つてゐた名草戸畔もこの支配下に全く服しこの紀伊國造として天孫一族の保護なり大和民族文化移住を將來したのである。

世は大和の御代に云ふも中央政府より遠い木ノ國は法も行はれず只名草戸畔の蠻首な無秩序な暮らしによつて生活を續けてゐたもので、この天孫一族の爲に影響を第一にうけたのは家族制度についてである、古來は妻<sup>ニ</sup>ひ<sup>ニ</sup>の習慣があつた事でその結婚の制度は一夫多妻主義であり、夫婦離れて住む風習をもつてゐたのである、そこに當然起るべき家族状態で父を知らない子も多からうし、子を知らぬ父も少くはなかつたであらう、父子の關係は一般に薄弱だつたに違ひない。一體に生活様式は勿論男は外で働くのであるがその資料は鳥獸の獵であつて、山から山へ駆け、野から野へ轉々として

獸を追つての生活であつて又氣節々々にもその住居を轉じてゐた事は惟し知る所である、父は子を養育する義務はなく母のみが子の養育にあたり、居がかたまれば雜居の状態でこの民族間にて行はれた結婚の状態も想像に難くない。古代の傳説が裏書してゐる如く男は只強くさへ居ればよいので、女は誰よりも美しい云ふ條件の下にあらゆる鬭争が彼等によりなされてゐた事だ、よし今迄は夫婦としての生活を續けて居ても此に他に夫より強い男性が現れて自分の夫に打ち勝てば又男が夫を殺したならば喜んでその強い男に隨ひ、又男は美しい女を見つけるならば蠻勇を振つてまでもうばひ取つてゐた、この様な中央政府から遠ざかつた住民の間にはそれだけでも亂れきつた状態や制度が行はれてゐたのである。見なくてはならない、此にこの大和民族の移入はいかにこの地方住民にさう一大恩恵であつたかどうかわひ知れる事だ、その地點は慈尊院、九度山、三谷の地附近の様である。（上古の文化中心は慈尊院、三谷の地方であつた事からして了解される）でもいかに亂れきつた土民云ふも少しは家族制度なるものを頭にもつてゐたらしい。勿論一種の宗教も……然しながらこの大和民族の文化制度云ふも完全なものではなかつたのだが只中央政府によつて習慣づけられたものにすぎない、でも之が土民にさう有益な事の大なるものは言ふまでもない。父子、母子間の結婚弊も次第に薄いだ事であらう、又この時初めて農業を教へてゐる様であるが丹生明神の告門によるこ、

「伊都郡町梨の御代御田作給」に出てゐるが之が事實行はれてゐたのならば農業により不住の生活が定住し安定し又氏姓を守るにも非常に恩恵をあたへた事は言をまたない所である、又宗教も當時は所謂トテム崇拜の信念しかなかつたのであるが大和民族の爲に祖先崇拜の信念を抱く様になり氏姓の尊重が強く職務の尊嚴がいやました事である、要するに丹生津姫命一族にうけたものによりこの山奥の國が割合に早く開けた所以も此にある事だ、而してその分業的な生活が初められたとするならばこの時からであつたであらう。しかして又吾人の大師前の文化の伸ぶるを見るならばもう一つ丹生津命の發展の状態を見ねばならん。されば先に記した大師の山地四至の勅許地域は天野告門に見れば丹生津姫命

の神地でありこの丹生津姫の神地については目につくものに二つある。神代に伊弉諾、伊弉冊二尊より譲りうけたとされてゐるものが一である。その神地は食國皇命給家地以萬許町、東限大日本國、南限南海、西限應神山谷、北限日本川冀也。である他の一とするものは應神天皇のよせられた神地である。

東 至<sub>二</sub>丹生川<sub>一</sub>

西 至<sub>二</sub>星川并神勾<sub>一</sub>

南 至<sub>二</sub>阿諦河南橫峰<sub>一</sub>

北 至<sub>二</sub>吉野川<sub>一</sub>

この二つを比べるに東、北、西は大體にて一致してゐるが南一方だけが違つてゐる、應神帝のよせられたのは南阿諦河の南橫峰に至るにされてゐるこの阿諦河に云ふのは有田川の事である而して之が後世勅許になつた大師の四至と一致してゐるのである、而して神代の神地の中の南海とは熊野の事であり、大變地域が廣くなつてゐる而して又西限應神山の應神山は應神天皇以後に名のついた山であつてこの點大いに疑しいのである、而しあの熊野權現は崇神天皇御代の建立とあるからしてそれ以前に丹生津姫一族がこの地も領してゐたに見られるのである、こもかく大師の四至は應神帝のよせられた四至と同じ故にその四至を見よう。

東至<sub>二</sub>丹生川<sub>一</sub> としてゐる丹生川は官符は東高山摩尼峰としてのつており「大日本國今大和國名也、紀伊國堺山地、謂丹生川々上是也」としてゐる、南は紀伊司案文に「譽田天皇定堺四至」として「當河南橫峰」としてゐるこの阿諦河は前にもものべた如く有田川の事で安帝川、當川、阿手河、在田川、有田川になつたのである、南橫峰とは今の白馬山の事であり、「南堺阿氏川南橫峰白馬云名所有之、件峰石塔有之、苔<sub>ハナ</sub>丹生大明神銘文有爲末代門徒記之與」このせてゐる（記堅師の記）西堺は官符に「謂神野山神勾谷及生石岑是又梶尾」と出てゐる。神勾とは神野川流域にして星川は「此地即ち丹生觀文に出づる丹生の神の西堺及び御手印縁起に載する所高野の四至に西界星川とある地是なり」と紀伊續風土記に出てゐる、次に北方であるが吉野川は紀の川である、官符には「北高山宇田峰謂丹生北吉野川南岑是也又云槇尾」とのせて

る、この宇由峰は横尾山の事で古くは有爲の峰と名づけてゐた、この有爲の峰が大師のあの「いろは」歌の中にある「うゑのおくやまけふこえて」の「うゑのをくやま」としてよまれてゐるのである、で大師はこのいろは歌で高野山開創以前なる事がわかるのである、かくして神地は應神天皇より丹生津姫によせられてゐるのである。

では一體現在高野明神としての丹生津姫をたしかめねばならぬのであるが古い記事には高野明神の一族は丹生津姫が到着せぬ前に已に當地にしての支配者としておさまつてゐた事である、丹生津姫から見れば高野明神の一族が地主であるにせねばならぬ、丹生津姫の高野明神の名を得たのは大師開創の時代にこの名を得たものと思はれる、政權が移つていつの間にか高野の地主の神となり統治權の故をもつて只高野の明神と言つた具合になつたのではあるまいかそれまでは天野か、この地方にすんでゐたものである、で大師が丹生津姫命の一族より舊神戸領を譲りうけたのであるからこの命を地主神として祀り奉り、又一方丹生津姫命にしては先住の神即地主神ともなるべき大名草彦を以て高野の地主神として高野明神として名づけられたのである、當時大師開創にあたり丹生津姫命の方が勢力あり高野明神の方に比較的勢力がなかつたから之より逆な見方をされたものよりこの様な見方をされたと思へばならない。

次に角高野明神等によりこの一族が大和民族に服従するによりこの地は漸くにして大和文化の源泉也となり永くこの思想に支配されてゐたが終に弘法大師の高野尋入により古い傳統をもつ大和文化が廢れて新しい大唐の絢爛たる文化の中心地と化し來つたのである、已前の文化進轉は古くから居住する高野明神の一族や大和民族なる丹生津姫命の一族がいかにしてこの地方を感化して來たかを詳にする事により見得られる、即大師以前は當地は大和民族よりなる神國であつて佛教と云ふ様な事が全然かゝわりがなかつたのである、之が惣神主宮内太郎家信と大師の會談より發して佛教國となり制度、習慣が佛教化してしまつたのである。

而して空海大師の新思想の發表はけだし一大驚異を感じしめた事であらう、それからあらぬが從來清涼殿裡八宗論揚即



身成佛示現の實際化的奇譚をして史實化せしめるだけの効果をきづきあけしめたのだから、この大日經の講釋は當代文化の實權を握つてゐた南都北嶺の法匠碩學をして一驚を喫せしめた事であるにちがひなからう……こも角にもこの大師が新思想の發表は野山文化思想の搖籃である。

次で又當時大師の高野文化精神の社會世相の月光に四つの雲點を見せられる、その芬華たるや勿論吾國の文運の功績に大なる事象を呈してゐるものだ。

初めに開山の初頭金堂には「摩訶毘盧遮那神變加持經」の開講源賴朝の發願になる高野山勸學院修學院兩大學の建築と傳法會の創設より秋刃城之介一門の入山等である、即最高學府の眞言道場の建説は何と言つても教學興隆、引いては野山發展にこりよりの貢獻はなからう、次に開版典籍における鎌倉時代文運の勃興であり、その上長覺、宥快の俊才の輩出により野山義學の大成と長覺、宥快を中心とする實性院、無量壽院兩學派の對立であり、室町文明の興起であると共に密教藝術の粹を行くあの逸作、赤不動明王尊あり、淨土藝術の優品である彌陀如來來迎圖であり又金石文化の精粹、北嶺の梵鐘等の諸藝術文化逸品の野山への運峰が之である。次には深覺應其入道が寺門興隆に専心してより土風國俗の美を發揚して世界的博愛至仁道にもこづく思想具體化として朝鮮陣碑の供養碑建設と元佑三要の入山がある、而して又茲に經典の刊行と語學の研究がある、即賴慶朝印が木活字版刊行についての經典の盛行、契沖阿闍梨の入山と相俟つて遊學の旺盛、國文學の勃興、ミ覺圓雅佛の蘭語、朝鮮語の研究があり、大德良基大教正の英語研究がある時、丁度勤王精神の旺盛よりして現代にまで及ぼしめる文化思想の四大大事象が史的に考察されるのである、而してこの建久三年頃より勸學院、修學院兩大學の建設、傳法會の草創により藤原末期より遅々たる文化もバツト開く形でありその時の表白文に曰く、

兼<sup>ニ</sup>學<sup>ヲ</sup>顯<sup>ス</sup>教<sup>ヲ</sup>潤<sup>ス</sup>色<sup>ヲ</sup>鴻<sup>ス</sup>業<sup>ヲ</sup>

從<sup>レ</sup>爾<sup>ヲ</sup>以來

學校<sup>ニ</sup>成<sup>シ</sup>林<sup>ヲ</sup>才<sup>ヲ</sup>士<sup>ヲ</sup>滿<sup>ッ</sup>朝<sup>ヲ</sup>

兩<sup>ノ</sup>部<sup>ヲ</sup>傳<sup>ヘ</sup>持<sup>テ</sup>有<sup>リ</sup>勇<sup>ヲ</sup>而

常<sup>ニ</sup>翫<sup>シ</sup>四<sup>ノ</sup>曼<sup>ヲ</sup>之<sup>ヲ</sup>覺<sup>ス</sup>蕊<sup>ヲ</sup>

三<sup>ノ</sup>密<sup>ヲ</sup>修<sup>シ</sup>練<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>怠<sup>ル</sup>而

鎮<sup>ヘン</sup>朗<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>智<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>圓<sup>ニ</sup>月<sup>ト</sup>

金<sup>ノ</sup>輪<sup>ヲ</sup>位<sup>ニ</sup>久<sup>ク</sup>而<sup>テ</sup>道<sup>ヲ</sup>德<sup>ヲ</sup>充<sup>テ</sup>九<sup>ノ</sup>野<sup>ニ</sup>

鐵<sup>ノ</sup>塔<sup>ヲ</sup>基<sup>ヲ</sup>固<sup>ク</sup>而<sup>テ</sup>法<sup>ヲ</sup>雨<sup>ヲ</sup>灑<sup>カシ</sup>一<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>

こあつて當時の隆盛旺盛をものがたつてゐる、而して經典信仰に貢獻したのは秋田城介景盛泰盛の入山入道より武家の盛力が野山文化に侵潤しそめたのである、それは經典開設の印刷事業だつた、この事は在來信仰の典籍書寫に思惟の信念、聖典秘密隱蔽をもつて純淨の信仰として來た二信仰を壊してしまつた様な事象にある、この時代俊、乘房、重源は延壽院を中心として連友社なるものを結んで淨土念佛を唱導する云ふ特記がある、この時又一方政權は京都を去り鎌倉に移り政治、文學の中心問題は鎌倉に移つてしまつたのである。

鎌倉文化の餘炎をうけその有終の美をなし後世後學の恩澤にあづからしめたものはあの長覺宥快の二法印である、二人は室町幕府の頭初に現れた二大學大成者である、一は無量壽院を中心に義を唱へ一は寶性院を中心に論を爭ひ茲に於てその才を残したのである、この室町時代は野山學派完成の時代で、而二、不二、一法界、多法界の二學說にてある併しこの學說は只枝葉にて論争の事で祖師にふれてゐない所に勤少の感があるが、あふなけのない事である、而して議論一般に専心した事である又藝術方面にても前に一寸あけた外に雜種多々異種異體の尊像畫像神體を畫き中でも密教々義上にも經文の解説にも祖意を無視した、かの立川流左道密教が誘致されたのは又文化史上の注目すべきものである

この時即天龜二年後先述の淨土藝術として阿彌陀如來來迎圖の到來した事は又亦文化史上特筆したい事柄である。

叙岳別所安樂谷大阿彌陀尊像廿五菩薩同山越三尊化佛等以上三體惠心僧都廿四歲秋眞筆依爲一天無隻之靈寶常者被付勅封納寶義之寶從往昔已來當七月十五日佛歡喜日者勅使參降開之令萬機例年無替一日之間貴賤參詣不知數四雲聳四方潤奇瑞隨念願新然元龜二天粹歲九月中二日澆季時山山上山下破滅之刻不消堂塔燒失之烟乍奪武勇逆徒手中兩集佛家未山希代靈驗併播濁世末法化導手於戲令奉遇此尊容譬以曇華出現旨龜浮木賴哉喜哉可仰可信仍勸諸人寸志致表具莊嚴勵無二懇篤凝往生修回冀者結衆臨終二十五菩薩來迎引接指掌無疑矣而已

天正十五乙亥年五月十五日

施主 法印 尊季 敬白

表補衣師 馬槍甚三郎 秀昌

又六千五百十五已の高麗版一切經を石田三成悲母菩提、追資又島津義弘父子により朝鮮陣供養碑、之又國民性の純眞、公表してあまりあるものである、一方文政の頃にますく諸國の才をあつめつゝ海外の事情を知り外來の文化輸入にありて又山一般の交通不便の中にて語學の研究に意を用ゐられた事は驚くの外はない良基大教正の語學、而して幕末には志士の往復而して世の騷然にも欣然として宗風を護持し此に至つた事はこの人により負ふ所の大きなものがあるのである。

而して彼等は溫古知新上は國恩に酬へ下は天下同好の下に祖德に報じるに専心してゐるのである、以上にて大體大師當時の文化交渉は終る事にするが以後にてはまだくつきる所がない、餘事は後章にまわす事にする。